

た。アンカラファンツィカ熱帯乾燥林を形作るさまざまな動物たち、その全貌を把握するには今後も継続的な調査が必要だが、その一端に触れることができたのではないだろうか。

引用文献

Fujimoto, Y., T. Kaneko, H. Sato, A. H. Rakotomamonjy, Z. L. Razafiarison and K. Kitajima. 2024. Topographical Gradient of

the Structure and Diversity of a Woody Plant Community in a Seasonally Dry Tropical Forest in Northwestern Madagascar, *Ecological Research* 1–12.

Howe, H. and J. Smallwood. 1982. Ecology of Seed Dispersal, *Annual Review of Ecology and Systematics* 13(1): 201–228.

Sato, H. 2022. Significance of Seed Dispersal by the Largest Frugivore for Large-diaspore Trees, *Scientific Reports* 12(1): 19086.

与えられ続けることの負債

——マレーシアのフィールド経験から——

河野 奈津美*

私には負債がある。それは金銭ではなく、与えられ続けることへの心理的な「負債」だ。日々の生活で小さなお菓子をもらったり、私の苦手なコンピューター関連で助けてもらったり、書いた文章に助言をもらったりすると、自分はいかにその相手に返せるかと思案してしまう。2023 年 8～9 月にマレーシアという私の日常とは異なる場所に滞在したときも、この負債は私につきまとい、いつしか私の研究の重要な裏テーマになった。本稿は、その現地滞在経験と私が研究対象とするイスラーム型保険の調査を通じて考えた負債に関する導入的考察である。

タカーフル販売員との出会い

私はタカーフルと呼ばれる、イスラーム型保険について研究している。マレーシアのタカーフル産業は政府主導で推進されていることもあり、その認証数や浸透率において右肩上がりの成長を続けている。そこで、タカーフル産業に関する調査を実施しようと思い 2023 年夏に初めてマレーシアに渡航した。どのように調査を始めればよいのか見当がつかなかったが、渡航前の 7 月という素晴らしいタイミングで、マレーシアのイスラーム企業で参与観察を行なった人類学者の先生がセミナーのために京都大学に訪れた。彼女が

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

パトリシア・スローン＝ホワイト教授 (Arts & Sciences, Department of Anthropology, University of Delaware) である。彼女の著書 *Corporate Islam* [Sloane-White 2018] は、シャリーア（イスラーム法）がマレーシアの企業文化に徐々に取り入れられ、そこで働く人たちの生き方に影響を与えていく様子を描いた。イスラームの教義に沿った経済、「イスラーム経済」を人類学的に調査した代表的な著作である。イスラーム経済の一端を担うタカーフルを研究する私にとって、大いに参照すべき1冊である。パトリシア教授に研究内容を相談に行くと、彼女は自身の知り合いであるタカーフル販売員を紹介してくれた。それが私の初めて出会ったタカーフル販売員、ワンヌール（60代女性）である。パトリシア教授が教えてくれた連絡先を登録し、Whatsappでメッセージを送ると、ワンヌールはすぐに返信をくれた。かくして私は、まずは1人、タカーフル販売員にインタビューができるだろうという希望をもってマレーシアに渡航した。

マレーシアの首都クアラルンプールでは、車窓が結露するほど冷房が強い電車に10分

ちょっと揺られれば、高層ビルが乱立する大都心から小さな食堂や商店が点在する雑多な街並みに移り変わる。クアラルンプールの中心から少し離れたショッピングモールのカフェで、ワンヌールと待ち合わせる。ワンヌールと同席していたリザ（40代女性）も、タカーフル販売員である。ワンヌールはいわゆる損害保険の類似商品である「一般タカーフル」を、リザは生命保険の類似商品である「家族タカーフル」を主に販売していると言う。扱うタカーフル商品の内容が被らないからか、この2人は一緒に行動する機会が多いようだ。調査協力者というだけでなく、人生の先輩ともいえる年上のマレー人女性2名に連れられた私は、昼食のためにワンヌールの運転でショッピングモールからインドネシア料理の店に移動した。10種類もの料理



写真1 クアラルンプールの街並み



写真2 アボカドジュース

を少量ずつとアボカドジュースを頼み、タカーフルからお互いの家族のことまであれこれと話した。アボカドジュースが好きな私は、こんなに美味しいものを食べたり飲んだりしながらしゃべることが研究の一部だなんて、不思議だなあと思っていた。

タカーフル販売員を始めとする、マレー人たちとの交流

まずはタカーフル販売員の2人と知り合えたこと、数時間ではあったけれどもインタビューができたことに満足しながら、私は帰路についた。というよりも、ワンヌールの運転で宿泊先まで送ってもらった。日本から買っていったお菓子を渡したけれども、確実にそれ以上の食事や送迎を与えられてしまった。宿泊先でインタビューした内容を文字に起こしている間にも、その日に撮った写真や今何しているのかというメッセージがWhatsappで送られてくる。さらに、ワンヌールを介して知り合ったリザから、「もしよければ自分のタカーフル営業の上司(boss)を紹介する」と提案される。願ったり叶ったりである。

リザと彼女の上司だというアブ・バカル(60代男性)と会ったのは、初めてリザと会ってから約2週間後のことだった。2人が販売員として働くタカーフル会社が入るビルで待ち合わせ、カフェに移動した。レモンケーキと酸味があるコーヒーを頂きながら、2人の仕事の話を聞いた。彼らはタカーフル会社の社員ではなく、タカーフル会社と代理販売の契約をして働く販売員であるため、仕

事の時間や場所を比較的自由に自分で選ぶことができる。そのため、平日の午後のような時間でも私とカフェでゆっくり過ごすことができる。一方で、販売手数料で営業成績を測られることもあり、かなりタフな仕事であるとアブ・バカルは語った。

それから1週間も経たずに、リザとアブ・バカルが私と会う時間をつくってくれた。しかも今回は、私の滞在先から徒歩3分ほどのショッピングモール内のカフェである。こってりと甘いガトーショコラとコーヒーを頂きながら、また仕事の話や日本の高齢化の話もする。私がこれからマレーシアのペナン島に行く予定を話すと、リザはペナン島にいる友人(kawan)を紹介してくれるという。

リザの紹介で、ペナンで会ったアヤ(70代男性)はリザの養父であるようだった。アヤもまた、私をペナンの美味しい食堂に連れて行ってくれた。マレーシアでの日常的な食事はナシ・チャンプルと呼ばれる、米に自分で選んだおかずをのせたワンプレート形式が多い。アヤがごちそうしてくれたのは、白米に大きなフライドチキンと(私が正しく聞き取れていれば)イカの卵のターメリック炒め



写真3 ペナンで食べたナシ・チャンプル

と、インゲンのような野菜炒めをのせた豪華なものだった。

最後にワンヌールとリザに会ったのは、帰国の2日前である。長い時間を一緒に過ごしたいからと言って、人気がある食堂での朝食から雑貨屋見学、そしてワンヌールの友人たちの集まりにまで同席させてもらった。ワンヌールの友人たちは11人、40～80代の男女であり、ゴルフ場に併設された中華レストランでテーブルを囲んでいた。友人が友人を呼ぶランダムな集まりで、元警察官の同僚が多いらしい。隣に座ったアミナ（60～70代女性）とマレーシアの親族付き合いや、休日の過ごし方について聞いた。昼食会の後はワンヌール、リザ、アミナ夫妻と私の5人で、近くのカラオケに行った。マレー語と英語はもちろん、日本語、韓国語、中国語、広東語、タイ語、ベトナム語など、多言語の曲が選択できることに驚いた。そして、親しみのある日本語の曲でも、歌詞がローマ字表記だと非常に歌いにくいと気がつくのであった。

与えられ続けることのもどかしさ

ここまで、私がやたらとカフェや食堂に連れて行ってもらう話ばかりが続いた。しかしここからが、そしてこれこそが本題である。私は返しきれないほどに、もらい過ぎなのだ。私が交流してきたマレー人たちは、私よりも1.5～2倍近く年上である。現在は学生で稼ぎがほとんどない私に対して、タカーフル販売員である彼／彼女たちはある程度の収入があるだろう。さらに私は、異国の地から

来た旅行者だった。年齢差、収入の差、そしてマレーシア在住者ではないという3つの要素から、私は常に与えられる側だった。一度、二度、「今回は私が払う」と提案したことはあったが、怪訝な顔で財布をしまうよう促すジェスチャーをされた。一度や二度ならありがたく受け取れる厚意であっても、それが三度、四度と続くと自分ばかり申し訳ないという思いが生じてくる。「美味しかった」「楽しかった」「ありがとう」のような言葉を伝えることを意識しているが、はたして奢られる側のよい姿勢とはどのようなものなのか。申し訳なさそうにするのか、平然としているのか、感謝を表するのか。私は、わざわざ時間をとり私と過ごしてくれて、タカーフルから暮らしのことまでさまざまな質問に答えてくれて、さらには美味しい食事をごちそうしてくれる彼／彼女らの行為を当然のものとは思っていない。それはとてもありがたいことだ。しかし、相手が当然と思ってやっているとしたら、それに対して大げさに感謝を表明することは、失礼とまではならなくても何か滑稽なことに映るかもしれない。負債の難しさは与えられる側としてとるべき態度への逡巡と、自分が返す側に回れないもどかしさにある。この心理的な負債は、フィールドワーカーが避けがたいものとして受け入れるしかないのだろうか。

負債を返す手段があるとすれば

与えてくれてばかりの彼／彼女らに直接返せないとしたら、可能性があるのは自分よりも下の世代に対して返すことなのかもしれない。

い。クアラルンプールの街中には、手軽につまめるような揚げ物を売るカウンターがある。店と呼べるほどではなく、路上に台を設置してその場で食材を揚げて売る形態だ。40～50代の女性が3人、交代で営業しており、午後になると小学校から帰ってきたのか10歳前後の少女2人が近くで遊んでいる。少量の揚げ物を購入してカウンター横の椅子に座って食べていると、少女が寄ってきて果物を手渡してくれた。彼女は現代っ子さながらグーグル翻訳を駆使して、「どこから来ましたか」「好きな色は何ですか」のような質問を投げかけてくる。年上のマレー人とばかり交流していた私にとって、自分の半分以下の年齢だろう少女とコミュニケーションをと

るのは新鮮だった。覚えたてのマレー語を一語、二語混ぜながら、グーグル翻訳を介して短い会話をする。それだけで何か相手の役に立つわけではないけれど、自分がこれから取り組む研究が、彼女たちの世代にとって少しでも良いことを還元できるものであったら嬉しい。そうすることでしか、マレーシアで蓄積されたありがたい負債感に行き場はないように思うのだ。

引用文献

Sloane-White, Patricia. 2018. *Corporate Islam: Sharia and the Modern Workplace*. New York: Cambridge University Press.

「自分は誰か」を定位する

——ガーナで感じた人々と関わることの難しさ——

内 凜 太 郎 *

ガーナで出会った日本人々

24時間あれば世界中どここの国でも飛行機で行くことができる今日、遠く離れたアフリカ大陸でも、日本人と出会うことは決して珍しいことではない。私がフィールドとするガーナでは、2023年10月1日現在、在留邦人は298名である。サハラ以南のアフリ

カでは南アフリカの1,065人、ケニアの742人に次いで3番目の規模となっている〔外務省2023〕。

そんなガーナであるが、西アフリカでは稀な英語圏であることや治安の良さを背景に、近年では日系企業からの注目を集め、これが在留邦人数の増加にも関係している。私は当

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科